

もっと自由に。 人間が自然に近づく 新たな建築思想をつくりたい

血がたぎる感動を
呼び起こした製鉄所

武田 今年1月、現代建築における空間表現の可能性を広げた業績が高く評価され、2009年度の「朝日賞」(※1)を受賞されました。改めてお祝い申し上げます。

先日、伊東先生が設計された東京渋谷区の「TOD'S表参道ビル」を拝見しましたが、表参道のけやき並木をシルエットに景観と調和したファサードが大変印象的でした。現在、国内の鉄の需要の40%が建築・土木向けであり、鉄はビルなどの建築物に不可欠な素材です。本日の対談を通して、当社の新たな鋼材開発へのヒント、また技術者・研究者へのメッセージをいただければうれしく思います。先生には、当社君津製鉄所を見学していただきましたが、まずその感想をお聞かせください。

建築家
伊東豊雄氏



◎プロフィール いとう・とよお

1941年韓国京城(ソウル)生まれ。65年東京大学建築学科卒業。菊竹清訓建築設計事務所勤務を経て71年(株)アーバンロボット(URBOT)を設立、79年に(株)伊東豊雄建築設計事務所に改称。代表作に「シルバーハット」「横浜風の塔」「八代市立博物館・未来の森ミュージアム」「せんだいメディアテーク」「サーペンタイン・ギャラリー・パヴィリオン 2002 (イギリス)」「TOD'S表参道ビル」「まつもと市民芸術館」「MIKIMOTO Ginza 2」「コニャック・ジェイ病院(パリ)」「VivoCity(シンガポール)」「多摩美術大学図書館(八王子キャンパス)」「2009 高雄ワールドゲームズメインスタジアム(台湾)」など。日本建築学会賞作品賞(85年、03年)、日本芸術院賞(99年)、朝日賞(09年度)など受賞多数。海外でもその革新的な活動が評価され、ヴェネツィア・ビエンナーレ金獅子賞(02年)、コルビュジェなど巨匠が名を連ねる王立英国建築家協会ロイヤルゴールドメダル(06年)、マドリード美術協会金メダル(09年)などを受賞。

※1 朝日賞：1929年に朝日新聞社が創設。学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、日本の文化や社会の発展、向上に貢献した個人・団体に贈られる賞。



建築設計事務所のスタッフと君津製鉄所を訪問された伊東先生。転炉から吹き上がる炎に歓声があがる

「建築の自由と楽しさ」を大胆に形にし、常に時代のムーブメントを生み出してきた建築家の伊東豊雄氏。既成の概念にとらわれないその建築スタイルは、昨年、ヨーロッパの文化保存を担う芸術関係の最高機関・マドリード美術協会から「現代の最も革新的で、影響力のある建築家の一人」と評された。今年の技術対談は、世界を舞台に活躍する伊東氏をお招きし、時代とともに変化する独自の建築表現やものづくりとしての建築のあり方、新しいものを生み出すための心得などについて伺った。



武田安夫

新日本製鉄(株) 代表取締役副社長

起こりそうな夢が膨らむダイナミックな感動を覚えました。建築でも最初のスケッチは、頭の中でもやもやして雲のようにまだ明確な形がない状態で、これからすごいことが起きるんじゃないかとワクワクする瞬間があります。

武田 巨大な高炉は鉄鉱石を溶融して鉄を取り出す製鉄所の象徴的な設備で、私たちにとっては頼もしく、美しい存在ですが、機能を追求した飾り気のない構造物です。ご覧になっていかがでしたか。

伊東 機能的な設備というよりも、産業革命の始まりのような良い意味で非常にプリミティブな印象を受けました。こういうものがあって人間の生活は基本的に成立していると実感しましたね。また、情報産業ばかりがもてはやされる時代に、ものの持つ力を間近で体感することができ、ものすごく感動的でした。建築の世界もコンピュータで図面を書いたり、実体ではなく空間や情報といった目に見えないものとして捉える傾向がある中で、打ちひしがれるような思いさえしました。

伊東 初めて製鉄所に入り、そのスケールの大きさに驚きました。特に印象的だったのは転炉から吹き上がる「炎」です。それを見た瞬間、血

がたぎるといふか、人間の文明の始まりはこれなんだという思いがしました。また、溶けた鋼が赤い塊(スラブ)になる姿に、これから何かが



1980年代の代表作の一つ「横浜風の塔」（撮影 新建築社写真部）

体全体で感じながら 時代とともに変化する 建築設計

武田 朝日賞などの記事で、伊東先生の作品について、70年代は小さな住空間に理想を埋め込むような「内向きの作風」、80年代は重くて泰然とした建築に抵抗を感じ「軽さや透明感」を求め、そして2001年に完成した「せんだいメディアテーク」（図書館やギャラリーなどの複合施設）を転機に、新しく柔らかで、かつ包容力があり外部との連続性を持つ空間を追求してきたと述べられていました。今日までの建築家としての歩みをお話いただけますか。

伊東 大学の建築学科を卒業後、菊竹清訓建築設計事務所に入り、数年後、何ら将来への展望もないままオフィスを構えました。当初は親戚や友人の住宅設計などを細々とやっていましたが、バブル経済下で商業施

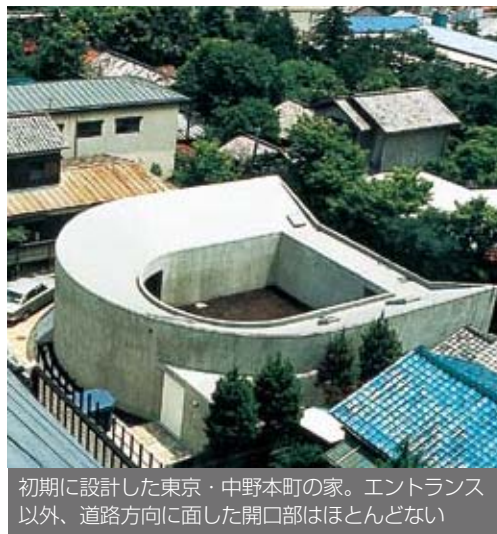
設を設計する機会が増えた80年代は、夢見心地な空間、情報でつくられる空間のような軽くて透明で実体感のないものにチャレンジしました。そしてバブル崩壊後の90年代半ばはまさに夢から覚めて、もっと力強い建築をつくりたいと思うようになりました。そのころちょうど公共建築の設計に携わる機会を得て、建築で社会に貢献できることはないかと考え始め、人々に元氣を与え、先ほどの鉄のお話のように「もの」として実感できるような建築をつくりたいと思い始めました。建築は常に時代とオーバーラップするものだ実感しています。

武田 そして最近では枝分かれというシンプルな秩序から複雑で豊かな周囲と響き合う環境をつくる「一本の木」が究極の目標だと言われていますね。

伊東 私がこれまで考えてきた建築は、どうしても20世紀の機能主義的な「機械のような建築」の延長上にありました。機械は目的を単純な機能に

置き換え、その機能の組み合わせにより効率的な性能を追求します。わかりやすく言うと、これまでの建築は寝る、食べるなどの単純な行為を空間に置き換え、その最適な組み合わせを追求してきました。しかし実際には、人間は寝ながらテレビを見るなど複雑な行為を同時にやっていますし、社会が多分化し人間関係や生活様式も多様化して、建築もこれまで考えてきた単純な機能では割り切れなくなってきました。

また、機能を追求すると周囲の環境との関係を断ち切ってしまうのですが、環境問題が問われる昨今、外部との関係をつくることは重要です。そこで外に開かれた空間として人間の生活や環境を捉える概念を「1本の木」に例えました。木は太陽や風の向き、隣の木との関係などさまざまな環境条件の中で自分の姿が決まってくる。そうした考え方が今後の建築には必要であり、私は「呼吸する柔らかい生命体のような建築」を目指したいと考えています。



初期に設計した東京・中野本町の家。エントランス以外、道路方向に面した開口部はほとんどない

周囲の景観との調和を図った TOD'S
(© Nacasa & Partners Inc.)



表参道ビル



シンガポールのショッピングセンター「VivoCity」屋上で人々が遊ぶ様子（撮影 新建築社写真部）



台中メトロポリタン・オペラハウスのコンペティション時の模型。
内部はいたるところ洞窟のような曲面の連続になっている

武田 世界的な課題となっている地球環境問題が、建築のあり方にも影響を及ぼしているのですね。

伊東 そうですね。例えば、利便性を追求した重装備のオフィスビルの中で働いていると、1人当たり10人分のCO₂を排出して、大勢の召使を使う王様のような贅沢、無駄をしていると言われるます。今後、建築自体をもう少し自然の空間に近づけていくと、人間の生活の仕方も変わるのではないかと思います。以前、シンガポールのショッピングセンターの屋上に池を配置して屋上庭園をつくる提案をしたところ、「冷房に慣れた人々はわざわざ暑い屋外に出ない」と言われましたが、実際につくると、まず子供が着の身着のままで水に入り、それを見て大人たちも入ってくる。動物的な本能に訴えるような設計にすると、意外に簡単に人は自然の快適性を求めると感じました。そういう自然に開かれた建築をつくりたいですね。

優れた設計と施工、 素材が融合して ものづくりは進化する

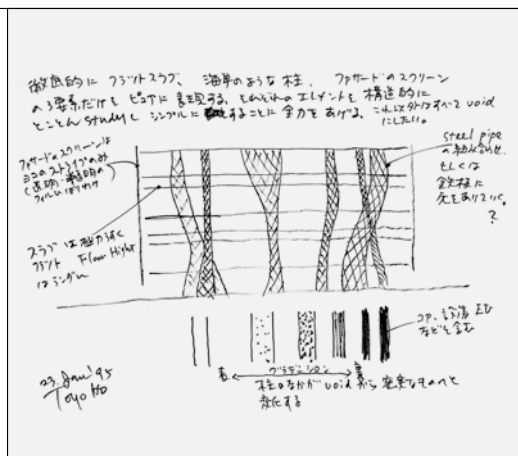
武田 建築デザインやアイデアを実際の構造に落とし込むとき、これは技術的に実現可能かと考え、素材の特徴を活かしながら、妥協を重ねて構造を決定していく過程を想像していましたが、例えば、先生が設計された台湾の「台中メトロポリタン・オペラハウス」（2013年完成予定）は、よくこんな構造が成り立つなと思うほど妥協のないデザインに見えます。そうした革新的な構造を実現する何か魔法があるのですか。

伊東 この10～15年のコンピュータによる構造解析技術の劇的な進歩が大きいですね。例えば、かつてアントニ・ガウディが建築物の設計時に、横に張った糸に等間隔で錘をつけてできる曲線を逆さまにして安定した建築構造を導き出しましたが、現在

ではそうした10年がかりのモデル化を1週間でできるし、私たちがイメージする自由な曲面、複雑なデザインも簡単に構造解析することができます。

むしろ難題はそのデザインを実現する施工技術です。幸い日本には、難易度の高い施工や実験的な建築に「俺がやってやる!」と手をあげる若くて優れた職人さんがまだいます。彼らは自ら3次元のCGを描き、現場でも私たち設計者が緊張するほどの雰囲気で見事に真摯に取り組んでくれます。彼らがいて初めて、私たちの設計が建築物として実現できるのです。

武田 少し次元は異なりますが、鉄の世界でもまさにそうした産業間の協業が重要で、単に素材を提供するだけではなく、お客様との共同研究などを通して鋼材利用技術にまで踏み込んだソリューションを提案できるところに日本鉄鋼業の強みがあります。伊東先生は、産業としての鉄鋼業をどのように評価されていますか。





多摩美術大学図書館内部の鉄の構造体
(建設中) と完成後のフロア (右)
(完成後写真 © 石黒写真研究所)



は、最終的にチーム数十人の集団としてのアイデアをまとめていきます。討論の過程で「次の時代の建築はこうだ!」という思想が共有できていれば、経験の違いを超えて個人の自由なアイデアを認め合い、組み合わせて目指すべき建築の姿を具現化することができます。

武田 「五感で考えよ」は、頭で考えて理屈で積み上げたことだけではなく、面白さなどを直感で捉える素直さが必要だといった理解をしています。直感で捉えたことを表現することは難しいですね。

伊東 特に今は情報も多く、何が気持ち良くて面白いのかということがわかりにくい時代です。私自身は若いころ「頭で考えたことは3日で変わるが、実際に手を動かし体全体でこれをやりたいと思ったことは一生変わらない」と五感で得る大切さを知り、初めて建築の面白さを実感した経験があり、若い人にもぜひ感じてほしいと思っています。

先ほどの「せんだいメディアテーク」では、通常の建物のようなフロアの案内表示がなくて自分が求める情報を歩いて探すしかないし、1階は広場のよう

にオープンな空間にしました。すると皆さん公園を散策するように自由に歩き回り、本能的に居心地のいい場所を選んで座っている。やはり人間は感覚的な生き物だと思います。

武田 「テーマを一言で語る習慣を身に付けよ」については、私も部下に対していつも言っていることで、これには大賛成ですね。一言で表せないのは観点が整理されておらず、どこかに無理がある。

伊東 私も時々大学で学生の課題を講評しますが、結局、何をやりたいのかわからないものが多いですね。「好き嫌い」のような論理的ではない言葉でもいいと思うのです。

武田 また、私たちの研究では、「GO」「STOP」の判断が大事と言いながらSTOPが非常に難しい。まさに「自らのアイデアを常に捨てる勇氣」、固執しない勇氣が大切だと感じています。

伊東 私たちも、ある設計がうまくいかないときにこだわり続けてしまいがちですが、経験上、最初に立ち返って別なことを考えたほうがいいケースが非常に多いですね。自分のアイデアに余りにこだわる

スタッフには「1回捨てる」と言っています。チームでやると言っておきながら私自身都合のいいときだけワンマンになる(笑)。

武田 現在ご自身の建築だけではなく、若手建築家の育成と地域交流を目的とする「今治市伊東豊雄建築ミュージアム(仮称)」(2011年夏完成予定)などのプロジェクトを進められていますね。

伊東 今後10年でリタイアする前提で、ある意味では自分の建築に取り組む以上に、若い人材の育成が使命だと感じています。私は90年代初めに熊本で公共建築の設計を行い、自分の建築にとっての転機を得ました。その縁で現在も「くまもとアートポリス」で、若い人に公共建築に携わるチャンスを与えるコミッショナーという仕事をしています。今治のミュージアムでは、地元の方と若い建築家が一緒に街の未来を考えたり、子供たちに街づくりや建築の面白さを伝えるワークショップを計画していますが、最終的に、さまざまな取り組みを通して21世紀の新たな建築論を確立させたいですね。

武田 伊東先生の今後ますますのご活躍を期待しています。